

思ひましたので『私だつて外に友達はありやしないのよ』と申しますと。

『ぢや、私を遊びお友達にして下さいませんか』と子之助は莞爾々々しながら言ひました。

『だがお前、何時までも私のお友達になつて遊ばかす。』

『え、もう、遊ばせてさへ下さるんなら、此のお花の上を御借り申して、茲を私の家とさめましてね、秋風が吹いて私が死んで仕舞いますまで遊ばすすとも。』

『ぢや明日から二人で遊ぶことにしやう。』と之れから、京ちゃんとお蝶子之助は至つて間の好いお友達となつて毎日のやうに面白く遊びましたと云ふ。

(京ちゃんの巻をばり)

二人兄弟

矢橋小葩

いつの頃でしたか、ある所に源一とお鋭といふ二人の、大層心のよくない夫婦がありました。

誰だつて、お父様やお母様は太切でせう。それにこの夫婦は、廣い世界に、たつた一人しかない而かも聾で、足腰のあまり自由でない、老人のお父さんを、それはそれは、ひどく取り扱かつて。

まわ、かうなんですの。

通常の人なら、自分等が食べなくつても、おいしいものは、先づ親に上げますのに、この夫婦は反對で、自分等ばかりいつでも御馳走を、食べてゐて、このおはれなお祖父さんには、きたないお膳で、かけたお茶碗で、毎日毎日朝も晩も、わづかぼつちな、ご飯と澤庵を二ツ切だけ。それより

外には何も上げないのです。

こんなにはされては、ほんとに嫌ですわねえ。それでも、お祖父さまは温順な人ですから、こんな不孝者を子に持ったのが、自分の因果だ。老いては子に従へといふ諺もあるから。と、かうわざわざ、ですが、心の中では泣いて、その日その日を送ってをりました。

ある日のことでした。

それは丁度、若葉すいしい夏のはじめで、色んな夏花が風に薫じて、大層心持の好い正午頃。けんは仕事が無いと見えて源一は新聞を見たりお茶を飲んだりしてゐたが、それにも倦みはて、しまつて、永い日を退屈まぎれ、お坐敷中をあたりこち歩いてをりました。お太陽様の光が、手洗鉢の水に照りかへされて障子にグル／＼廻つてる影

が、おもしろいので、ボンヤリ立って眺めてゐました。

すると、何だかさも愉快さうな話聲か聞えますので、障子をわけて見ますと、自分の子の太一と次男の兄弟が、お茶碗や、廣ぶたや、庖刀などの玩具で、まゝごととして遊んでゐるのです。

で、源一は柱に凭れて見てゐました。

『お前、こんだお祖父さんになるんだぜ』と兄の太一さんが、次男さんに申しました。

『いやだア、いつでも兄さんは、お父さんにばかりなつて、づるいや』とさも不興氣に云ふ。

『だつて、あとで好いもの上るから』

『いやだア』

『だつて、ね?』

『いや、僕、お父さんになるんだつたら』

『ぢやア、いゝや、もうこれから遊んでもやらな  
しし……………』

さあ、かう云はれたので次男は堪らない。とう  
とう兄さまに敗けて、お祖父さんの役目に澁々な  
りました。

まづ腰をまげて、わざとヨボ／＼とれ祖父さま  
の眞似して、椽側に坐りなほしました。

すると、太一さんは、最等きたならしい茶腕に  
まづさうなれ菓子を、ホンのすこしぼツち入れて  
わざと、げんどんに、いつもお父様やお母さんの  
いふやうな聲色で、『祖父さん、さア御飯だよ』と  
云つて、次男さんのお祖父さんの前において、  
そして、自分ばかり佳味さうなお菓子をムシヤ  
／＼食べてをります。次男さんこそ、本統に好い  
迷惑だ。まづいのを食べて、兄さんの食べている

のを見ていなければなりません。

是を見ていたお父さんの源一は、太一さんにか  
う尋ねました。

『太一や、それは何の遊びだい？』

ところが 太一さんの答へが面白いではありま  
せんか。

『僕、大きくなつてお父さんのやうになつてから  
お父さんがお祖父さんにするよう、僕もお父さん  
にしてあげやうと思つて、それで、眞似してるの  
……………』

\* \* \* \* \*  
此の日からといふものは。源一もお鋭も生れか  
はつたやうに、お祖父さまを大層大切にして、お  
孝行をつくしましたさうです。(四月九日夜稿)